

# 史料館報

第 69 号

平成10年 9 月



館長就任にあたって

高木 俊輔

私は、四月一日に史料館長に就任いたしましたのでご挨拶申し上げます。

私どもの史料館は、一九五二年(昭和二十六)の文部省史料館としての設立から四十七年、国文学研究資料館史料館となつてから二十六年、の歴史を重ねています。前任の森安彦館長の後を承けまして、「史料館の事務を掌理する」という日々の職務に携わり始めましたが、史料館を取り巻く状況のきびしさは、予想をこえるものがあります。課題の大きさにくらべあまりにも微力ですが、皆様のご指導とご協力をいただき助けてまいりたいと思います。

現在史料館では、専任教官十人の構成メンバーによって、①情報閲覧サービス機能、②研究機能、③教育

機能という三つの柱を立てて仕事をしています。国文学研究資料館史料館となつて以来常勤の定員は増えて

いませんが、これら頼に多量かつ多様化する業務に対して、非常勤職員の補充により辛うじて切り抜けてきました。その概要について述べたいと思います。

まず、史料館の業務として史料の収集、整理、保存、利用があります。現物史料については最近史料の現地保存の趣旨に則り、必要なものはマイクロ収集を行っています。一九六〇年代までに収集した五十万点をこえる史料は、逐次整理して史料目録を刊行していますが、四百件に及ぶ所蔵史料について概要データの公開のため『史料館収蔵史料総覧』(平成八年)を刊行し、利用の便に

## 目次

館長就任にあたって……………高木俊輔(1)	第二次世界大戦期アジアにおける「戦争とアーカイブズ」の問題……………安藤正人(8)
史料館外国人研究員としての半年間……………フィリップ・カールトン・ブラウン(2)	私の村落史研究……………山崎圭(10)
尾張国海西郡森津新田武田家文書の整理を終えて……………大友一雄(4)	平成九年度新収史料紹介……………受贈図書……………(11)
紙の産地と紙質……………青木陸(5)	『松代藩庁と記録』の刊行……………山田哲好(6)
供しています。所蔵史料の保存対策としては保存用紙の中性紙化、劣化予防研究などを行い、当館所蔵重要史料はマイクロ収集分も含めて第二期の『史料叢書』を刊行し始めました。また今まで全国的に行ってきた県市区町村史誌類や史(資)料集、地方史関係定期刊行物の収集の充実に努めるとともに、これらの全面的な閲覧公開と複写サービスの実施をはかりつつあります。なお情報センタールの機能を目指して蓄積してきた全国の史料所在情報は、本年度中にインターネットで公開できるように準備中です。	研究・教育機能面では、史料管理学研修会を実施してきて今年で通算四十四回、二千五百人をこえる受講生を数えています。今年は、国立公文書館において公文書館等の「専門職員養成課程」が開始されることになり、独自性を追求しながら、より充実した研修会を継続したいと考えています。

以上、現状について述べました。あまりに小規模で将来への展望には厳しいものがありますが、この現状を一步でも前進させたいと念じています。重ねて史料館内外の多くの方々のご支援・ご協力をお願いいたします。

## 史料館外国人研究員としての半年間

オハイオ州立大学准教授

フイリップ・カールトン・ブラウン

### 史料館との出会い

私は、今から一三年前の一九八五年から史料館収蔵史料の利用者となり、主に近世の割地制度について調査研究を進めてきた。

初めて史料館を紹介いただいたのは安澤秀一さん(当時史料館員)であった。その当時から、安藤正人、山田哲好、青木(広瀬)睦さんたち(いずれも現史料館員)とは史料館の業務内容や研究活動、さらには日本の史料保存と利用に関わる問題について、具体的な話しを聞く機会があり、それもひとつの契機となつて、昨年九月から今年三月まで、史料館に外国人研究員として六カ月間滞在した。

その間、さまざまな共同研究発表会やワークショップに参加できたことは、望外の喜びであると同時に、史料館の活動を改めて知る機会を得たことも大きな収穫であった。

そこで本稿では、半年に及ぶ滞在期間をふりかえり、若干の感想と史

料館に対する提言を述べることとする。

### 史料館の最近の活動

まず、最近の史料館の活動について、特に次の点に注目した。

- ①海外での活動Ⅱ海外に所在する日本関係史料の所在と現状に関する調査や史料保存対策の助言と指導など
- ②国内の活動とその影響Ⅱ史料管理学の発展に寄与するための研究と教育(史料館内と沖縄県立公文書館などで開かれたワークショップや研修会を通じて)
- ③館内における史料整理や史料保存活動

これらについての具体的な活動は、『史料館報』などを通じて報告されているが、国内だけではなく、世界に向けて積極的に活動を報告する機会を増やすよう望みたい。そのためには、海外の学会で報告する機会を

積極的に得ることが望ましい。たとえば、

- ①史料の保存対策における要点とそれを解決する努力の報告、
- ②外国人研究者の間では、東大史料編纂所の活動はかなり知られているが、それに対して、史料館の役割と独自性の説明をする報告、
- ③日本各地に存立する史料保存利用機関との共同研究活動の報告、
- ④最近の主な活動とその傾向の報告などである。

これらの報告は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの諸学会においてパネル形式でも報告ができる。学会例をあげれば、Association for Asian Studies(「アジア研究会」)、American Historical Association(「アメリカ歴史学会」)、European Association for Japanese Studies(「ヨーロッパ日本研究会」)などがある。

このような活動報告により、海外において、史料館の活動や独自の役割、さらには日本の史料保存の現状ではないかと期待している。

### 外国人招聘プログラム

一方で外国人研究員招聘プログラムをさらに充実させることにより、

海外の日本史研究にも影響を与えられると思う。たとえば、西洋の日本史研究者は活字史料に頼っているケースが圧倒的に多い現状にある。アメリカの大学院コースでも、原史料読解の教育はほとんどなされていない。

史料館は、外国人研究員招聘プログラムで、西洋における日本研究の状況を直接的に改善はできないが、史料館で収蔵している史料を積極的に利用するような人(原史料を読解できることは最低限の要件である)が招聘されることによって、その人のそれまでの原史料を用いて研究を進めてきた姿勢が認められると同時にその努力が報われることになる。これによって原史料を用いて研究する重要性を外国の研究者に伝えられると思う。その上、本人が帰国してから原史料を積極的に活用するなどの影響を他の研究者に与え、教育プログラムの改善に寄与できるのではないかと思う。

また外国人研究員招聘プログラムを通して、海外における日本の史料学のイメージを変えることもできるだろう。

ヨーロッパの現状はよく把握していないが、アメリカにおける史料学

の位置づけは、重要視されていないといえる。史料学は、主に文書の形態や大きさを計測するような研究であると思われるのである。

しかし、私は史料館のさまざまなワークショップに参加して、現代日本の史料学は、歴史学と密接な関係にあることが理解できた。その例をあげるならば、ある発表では、地方行政の構造を、史料として残された文書の送受過程から説明している。マニュアルに書かれているままの行政構造よりも、実際の生の文書を史料学的に研究することによって、もっと微妙な構造や権力関係が解明できる。さらに、マニュアルがないところでも、このような史料学研究を通して、行政構造全体を解き明かすことができるのである。

アメリカの日本史研究者の中で、史料管理学とか史料学を研究している人はまずいないので、外国人研究者との共同研究テーマを決める際に、候補者の研究テーマを尊重しながら、史料管理学や史料学と歴史学の関係を考察できるテーマを加えることができるればいいと考える。そうすれば、外国人研究員の候補者が史料学の役割を考え直す大きな刺激になるであろう。

#### 外国人研究者との共同研究

最後に、外国の研究者との共同研究について、出席者の準備とその時間を効果的に使うために、アメリカでしばしば用いられる方法を提案したい。アメリカでは、シンポジウムあるいはワークショップを開く前に論文とか非常に詳しいアウトラインを少なくとも一週間前に全参加者に配布し、事前に原稿を読んだ上で、ワークショップに参加する。こうすることによって、より突っ込んだ討論ができる場になることを最も重視している。

将来の共同研究のありかたとして、是非このような方法を採用してみてもどうかであろうか。

#### 共同研究会

私は、六カ月間の滞在の中で、毎日生の史料を利用して研究できたことは、大変すばらしい経験であったと思っている。

特に私の研究テーマに関連して、今年の一月二六、二七日、二月二七日の二度、共同研究会（「近世の農民・自然・年貢制度」）を設定し、史料館員はもとより多くの研究者と交流することができたことに感謝したい。その参加者は、青野春水（徳

島文理大学）、高澤裕一（金沢大学文学部）、深谷克己（早稲田大学文学部）、船橋明宏（千葉県史料研究財団調査協力員）、松永靖夫（元新潟県立三条高等学校）、渡邊尚志（一橋大学社会学部）の諸氏である。

第一回目の報告は、筆者の「割地制度・そこから見たおもしろさ、中から見た複雑さ」、青野氏「近世貢租における公平の問題―土地年貢からみた」、松永氏「越後南部農村の頼母子講をめぐる」、第二回目は、深谷氏「割地政策に反対した百姓一揆―寛政八年安濃津地割騒動」、船橋氏「明治三年の村方騒動と割地制―越後国頸城郡岩手村を事例として」、以上、五本の報告がなされた。

紙数の関係で個別報告の内容については省略するが、割地制度を基軸に、世界的な比較検討する観点から地域の詳細な実証分析まで、幅広く、かつ新鮮な論点が提示されたことは大きな成果であった。この分野で指導的な研究を行ってきたベテラン研究者と、若手研究者との共同研究の機会を得ることができて非常に感謝している。

史料館が、将来この外国人研究員招聘プログラムを通して、外国の史

料学や日本史研究の発展に大きな影響を与えるようになることを期待している。

おわりに、松野陽一（国文学研究資料館館長、森安彦（史料館長（滞在期間中）はじめ、史料館を含めたスタッフの皆さん、特に、来日前、頻繁に連絡の労をとられた福田千鶴さん、それから事務的な手続と処理については管理部の方々に大変お世話になったことに対して、末筆ながら深甚なる謝意を表したい。

#### （筆者紹介）

フィリップ・カールトン・ブラウン（Philip Carlton Brown）  
一九四七年生まれ。歴史学博士。日本史学専攻。現在オハイオ州立大学歴史学部准教授。著書に『Central Authority and Local Autonomy in the Formation of Early Modern Japan: The Case of Kaga Domain』 Stanford University Press, California 1993.（近世成立期における中央権力と地方のオートノミー：加賀藩の場合）がある。一九九七年九月―一九九八年三月、COE外国人研究員として史料館に在籍。

## 尾張国海西郡森津新田武田家文書の整理を終えて

大友 一雄

当館では毎年二冊の所蔵史料目録を刊行してきた。二人の館員がそれぞれ一冊を仕上げるが、従来、この作業は、文書一点ごとにカードを作成し、これを分類編成して目録を作る手順を踏んでいた。

しかし、近年ではパソコンを利用したカードレス化の動きもある。当館以外では、すでに当然の行為であるかもしれないが、当方も、今回利用してみた。ここでは、その作業手順の一端について記しておきたい。

なお、対象とした文書群は尾張国海西郡森津新田に居住した武田家に伝来したものである。内容的には庄屋・戸長・地主経営などに関するものが多い。

さて、作業は、概ね次のような手順で進めた。①仮目録情報の入力、②古文書によって①データの修正、③分類編成、④印刷業者用データの生成、⑤校正である。ここでは①から④までの作業について述べることにする。

①では、昭和二十四年、武田家文書が当館へ譲渡された折に作成された簡略な配架順目録（仮目録・集計用

紙を利用。データ数五〇〇件余）を業者発注して入力した。仮目録は「御年貢船積帳 天保十年―明治五年二二冊」というように同内容のものを取り集め、それを一件とするため、実際の文書点数に比するとレコード数は少ない。最終的なレコード数は、三四〇〇件余であり、五〇〇件余のデータの輸入は、あくまで準備段階の補助的な作業である。

②は古文書を実際に確認しながら①でのデータを修正・追加した。作業はパソコン上で直接行った。同様の表題などが続く場合は、データの複写機能によって作業はスムーズに進んだ。業者入力データの存在は、不十分な点もあるとはいえ、入力に慣れない場合は有難いものであり、諸先輩館員の仮目録作成作業の上に仕事を積み重ね、目録を作成することが可能となった。

なお、このデータ修正・追加は、仮目録の記述順、つまり当館での文書配架順に従って入力した。この作業が配架順目録の作成作業となる点にも留意しておきたい。また、この作業は、当初ワープロ・エディター

上で行い、一定のデータを蓄積した段階で、データベースに載せ、以後はデータ入力もここで行なった。

③は、まず、組織体の構造、古文書群の階層構造についての分析を行い、仮説を立て、これに従ってデータ一件ごとに、階層中における位置を確定していった。具体的には、同種の文書を検索によって取り出し、それを年代順などに並べるという作業である。従来のカードによる作業であるならば、カードの並べ換えということになる。ただし、少々異なるのは、階層中における位置を確定するために、データベース上に新規項目を設定し、キーワードを同時に与えたことである。たとえば「森津新田／庄屋／年貢／年貢割付状」などという文言をできるだけ一括処理で与え、この措置で配列順を確定することを試み、不十分である場合は、上記の文言に数値などを適宜与え、配列箇所を確定した。

しかも、このキーワード付与は、組織構造を踏まえた文書配列を可能とすると同時に、キーワード検索も実現させることになった。すべての利用者の要求に応えるだけのキーワードの付与は、不可能であるが、少なくとも本書で示した組織構造を踏

まえた検索は可能であり、表題・差出などと関連させて検索することにより、限定したものの検索も可能となるはずである。

なお、ここでの分類編成作業は、同一表題のものをを一括処理する場合には円滑であるが、表題などから編成箇所を判断できない場合は、結局、文書一点ごとに再点検が必要となる。この手間を減らすには、できるだけ早い段階で組織構造の分析を行ない、仮説をたて、②の作業の中で編成情報を付与することが必要と考えられた。

④目録印刷業者には、目録データをフロッピーで渡した。狙いは業者の作業支援を行い、スムーズな納品、印刷経費の削減を果たすことである。このため、手渡しデータの構造については、業者との間で事前確認し、先方の希望の形でテキストデータを生成した。そのために簡単なシステム開発も実施した。業者には、組み見本とテキストデータを渡し、割付作業などは省力化できるように配慮した。

なお、本作業におけるデータ処理は、当館リサーチ・アシスタント五島敏芳氏の全面的な協力を得た。

## 紙の産地と紙質

——「越後国三島郡深沢村高頭家文書目録」を刊行して——

青木 睦

本目録収録の文書は、越後国三島

郡深沢村（現新潟県長岡市深沢町）

高頭家の原蔵にかかり、一九六五（昭和四〇）年、当館が故紙業者より購入したものである。総点数四、八二四点（表題タイトル数三、七三七件）を『史料館所蔵史料目録第六十七集』として編集刊行したものである。

高頭家文書は、大別して、①享保頃（一七二〇年代）から明治四（一八七二）年までの約一五〇年間、深沢村の本村（後の五郎八組）庄屋を勤め、一時九左衛門組の懸持庄屋役を勤めたことによって作成され伝来した深沢村五郎八組・九左衛門組文書、②深沢村全体（五郎八組・九左衛門組・茂兵衛組）の運営に関わる三組文書、③高頭家の家政・経営に関して私的に作成され伝来した「家」文書、の三つの文書群から構成される。なお、高頭家は、安永九年以降長岡藩の割元格に就任している。

目録刊行にあたり、本文書群の紙質の特徴について気付いたことをこ

の場を借りて報告したい。

高頭家の文書群を日々整理に際して目にし触れていると、多くの料紙が強目の厚めで黄色い紙質という特徴を持っていることに気付く。特に冊子型史料が黄色めであることが際だち、美濃紙に比して腰も強く厚手に感じられる。

文書の料紙の種類について、入用帳等の記載の一部にみられる紙の購入と使用用途は次の通りである。

○小国紙式束代 三組年番諸帳面并

問屋中使三人へ渡候分

小国紙壹束代 右は諸帳面嶋方割

札入用（文化七年「三組入用銀割帳」）

○のり入紙 式枚、西紙 壹折、小

国紙五帖 但し三帖ハ古田地割帳

（文政九年「里漆元木御改二付

御蛸座出役入用覚」）

○美濃紙 壹状、縁切 壹束

（文政二年「御検見入用附込帳」）

○以（伊）沢紙三状 小村や平兵衛、小国紙式状 條右衛門、人別増減

帳 同人、同式拾枚 五人組帳

（「寅ノ宗役取立覚」）

これらの記載内容から、小国紙・伊沢紙・美濃紙がそれぞれどの文書の記録用に購入したかが窺うことができる。美濃紙は近世において記録用に広範に使用された楮紙として有名であるので説明を要しないが、小国紙・伊沢紙について少し触れておきたい。

小国紙も伊沢紙も越後地元産の紙の名称である。小国紙は、「刈羽郡小国郷内にて製す。一折四十枚、一

（十力）折を一束とす。紙の盤、堅九寸二分、横一尺三寸、端を裁す。厚薄精粗あり。糊を加ひざる故に質

堅し」「強い張り」と素朴の手ざわりが障子や帳簿、変ったところでは白根

名産の風紙、花火玉の下張りに欠かせないものとなっている。」「この山

野田の小国紙は、長岡へ古から移入され、嘉永のころは柏崎・十日町な

どともににおおきな取り引き先きであった」（『長岡の歴史』第三巻）と

あって、高頭家では大量に消費する記録紙を長岡より南へ二〇km程の位

置にある近在より求めていたのである。『越後の和紙』によれば、小国

紙の強い張り」と素朴な手触りは、雪晒しで純楮のみを用い、湿紙を雪に

埋めて圧搾するカングレを行って、晴天に干し板に張る技法によると記している。

伊沢紙は、長岡より五〇km程の東頸城郡松代町（旧伊沢村）が産地で、小国紙よりも大判で厚い一尺×一尺四寸でカングレを行わず、台帳用紙にも用いられたものである（『和紙文化辞典』久米康生著）。

以上のように高頭家文書群の場合、産地が特定できる紙名と文書料紙との結びつきが明確に判断できる表記があることは特筆に値する。それぞれの産地別の紙をどのような文書に使い分けをしたかを明らかにすることができるのである。よって、地域ごとに用いられる文書料紙の違いについて地域的特質という観点で見直すことができる文書群なのである。

整理中、すべての冊子型史料について堅と横の寸法計測を行った結果、寸法の違いによって小国紙と他の系統の紙と区別することも判明した。史料の理解を深めるために、地域独自の料紙の大きさや種類に意を払うことも必要であろうと思ひ、今後の課題のひとつとして提示した次第である。

〔史料叢書2〕

『松代藩庁と記録』——松代藩「日記繰出」——の刊行

山田 哲 好

信濃国更級・水内の両郡を中心に、埴科・高井の両郡の一部（川中島四郡）をも領有した外様中藩（一〇万石）である松代藩真田家文書は、旧蔵地である現在長野市所管の真田宝物館と国文学研究資料館史料館（以下史料館と略）の二か所に分散保管されている。その概数は、真田宝物館約一万点、史料館約三万点（いずれも整理済み、他に真田家より寄託された約二千点も史料館で収蔵）で、いわゆる藩政記録として質量ともに第一級に属するものである。両機関とも未だ整理が完了していないので正確は期し難いが、最終的には六万点を超えるのものと予想される。

史料館蔵の真田家文書（一九五一年に受入）は、国元（松代）と江戸藩邸との両方にまたがる記録を含んでいることから、これが松代藩に関する基本的な記録であることは改めて指摘するまでもない。大名家文書を、その内容から、いわゆる家に関する記録と藩の行政を中心とした藩庁記録とに分けるとすれば、本文

書群の特色は圧倒的に藩庁記録の比重が大きいことである。このような観点から、真田家文書と称するより松代藩庁記録とするのが正確であろう。さらに藩庁の記録といっても、例えば法制などを主とする編纂され

整理された記録の場合もあるが、本文書群では、そのような記録は殆ど見当たらず、藩の各役局で日常の業務遂行の必要性から作成された生の記録が圧倒的に多い。このことと深く関連して、藩主や側近家臣または家老たちが関与する藩の重要政策に偏らず、藩の職制や業務上では末端に近いと思われる人々や職務に関する事柄を示す記録が残っており、通常では保存されずに廃棄されてしまう瑣末な記録が大量に残っていること、さらにその残り方も当時の保存状態を今に伝えてくれることは特筆に値しよう。こうした記録の残存形態は、初代信之以来転封がなかったために、移動による記録の廃棄や紛失を免れたことが幸いしたものと考えられる。

本書は、この松代藩庁記録の中の「日記繰出」を翻刻し、解題と索引を付載したものである。史料館蔵松代藩庁記録の日記類の総点数は約一八〇〇冊である。この日記類は、「家老日記（江戸・国元）」をはじめ、藩の職制ごとに作成された、いわば公的な日記類である。中でも「家老日記」は貞享三（一六八六）年から明治四（一八七二）年まで、二八九冊残存しており、質量ともに松代藩政の基本的記録と位置づけることができる。その中での「日記繰出」類は、

目録上では全部で五〇冊である。その表題は、「繰出」「繰出帳」「繰出録」「繰出目録」「前録探索」などと付けられている。その内容に共通することは、日記の記事を、事項別あるいは役職別に分けて編年順に抽出したもので、即ち索引を作成したことにも他ならない。その目的は、いうまでもなく特定事項について先例を迅速に検索し、執務の参考にするための手段としてであり、そのことを端的に示しているのが前掲表題の「前録探索」である。一案件を処理する際に、前例を参照する必要が頻繁にあったということである。その証拠として、表紙が欠損していたり、磨耗が甚だしいものが多い。

本書に収録したのは、事項別に編纂された二種の「繰出」で、それぞれの収録年代は延宝三（一六七五）年～文政六（一八二三）年と天保二（一八三二）年～嘉永五（一八五二）年である。

前者の事項は、「公私御吉事」（二四九条）、「公私御凶事 御法事」（二五四条）、「公辺」（二三一条）、「御朱印 御条目」（四三条）、「文武軍防」（二六条）、「駅路」（五八条）、「公私雑」（二二八条）、「公私御儉約」（一〇八条）、「公私御勝手 御普請」（三三条）、「公私御尋者」（六八条）、「公私寺社」（一七一条）、「公私農工商」（一二〇条）、以上一一項、一六一条である。後者の「繰出」は、原本では二冊（天保二年～同一四年と弘化元年～嘉永五年）であり、その事項は、「公辺」（六一一条）、「御城内」（二五一条）、「御出御代参」（一四九条）、「御吉事類」（九七条）、「御凶事類」（二二条）、「御法事」（八一一条）、「御祈禱事」（七〇条）、「御靈屋 御位牌堂 御廟所」（三八条）、「御親類様方」（一八条）、「神仏」（七八条）、「慎触演説」（九条）、「文武」（一二条）、「他所縁組」（九四条）、「他所湯治」（一五三条）、「他出」（三八二条）、「屋敷地」（九六条）、「類族」（一五五条）、「前髪剃改名無願被仰付并落

髪祝髪長髪(五九条)、「浪人」(五六条)、「御出入御徳居」(一一〇条)、「孝行奇特螺寡孤独并長寿」(一二三〇条)、「農工商」(三一九条)、「水火」(一〇七条)、「異変」(二四四條)、「御暇出奔 退身 勘当」(七三條)、「駅路山川 道橋」(二二五條)、「牛馬」(七条)、「寺社」(七二三條)、「御普請」(二一条)、「雑」(二五條、以下の二項は弘化元年以降のみ)、「上々様」(二五條)であり、以上三一項、三五〇三條で、全合計で五一一九條である。

これらの「繰出」を編纂するに当たって、その典拠となったものは何か、という点である。その手がかりは、各箇条の留文言で、「従公儀被仰出一統江相触」「御家中江演説申渡」「御城代・御目付江申渡」「郡奉行・御勘定吟味・道橋奉行江心得申渡」「申渡候旨郡奉行申聞」とあり、全家中への触や申渡、あるいは担当役職へ直接指示を出している。そこで、「繰出」の特定年代について、記事の全てにわたって典拠確認作業を行った結果、「国家老日記」であることが確認できた。

家老は、大名家の重臣として藩政を主宰し総覧する最高の職制で、多くは藩主の一族や譜代の重臣より選ばれた。人数は多くは一〇数名、少

なくとも二、三人を擁し、合議輪番制により藩政を執行した。松代藩の場合、寛文一〇(一六七〇)年頃就任した矢沢但馬から慶応四(一八六八)年に就任した玉川左門に至るまで七三名の変遷があり、延享四(一七四七)年の定員は七名(松代五名、江戸二名)、安政六(一八五九)年では五名(松代四名、江戸一名)で、文政八(一八二五)年以降は五名程度であった。この重臣の「家老日記」から「繰出」を編纂したことは、藩政全般をカバーできる点で価値は大きいといえよう。本書の副タイトルを「松代藩庁と記録」としたのは、前述の松代藩真田家文書の概要と特色で指摘したが、伝来経過はもとより、個々の文書の存在意義に特色があり、そして上記のような「繰出」類を編集したことは、近世・近代の記録管理の実態が反映していると考えたからである。

次に「国家老日記」から「日記繰出」への採録方法は、両方の記事が「一対一対応」、「日記」では同日付で数か条の記事を「繰出」で一箇条に集約、「日記」では異なる日付で数か条の記事を「繰出」では一箇条に集約(異なる日付は「繰出」では、小文字で補記)している。したがっ

て、「繰出」の記事は、省略も多く、「日記」では一〇丁を超える記事も「繰出」では一箇条、転記段階での誤字・脱字や誤謬も散見される。この点を考慮して、本書の編集(索引をも含めて)で生じた疑問点については、典拠の「日記」の記事を確認し、誤字や脱字を補記したが、索引編集過程での成果が想像以上に大きかった。ところで、膨大な量の日記からこのような「繰出」を編集する作業は、想像を絶するような多大な労力と根拠を要する作業であったことは想像に難くない。

終わりに、本書編集の意義をまとめると、

- ・「国家老日記」を典拠としていることで、家老の職務や機能についての実体把握が可能であること、
- ・個別の案件を処理する際に、どの役職が関与するのかが、職務分担の実体把握が可能であること、
- ・上記の観点では、「国家老日記」を翻刻するのが最善策であるが、その量と編集・刊行スケジュールからしても困難な点を、事項別に情報集約できたこと、
- ・現存する「国家老日記」は、他の日記と比較して冊数は多いが欠も

多く、その欠部分の情報に補うことができないこと、

- ・「繰出」類は、他の大名家でも事例があるが翻刻の事例がないこと、などである。

なお、巻末に地名、人名・寺社名、役職名の索引を、データベースを基に編集して採録した(地名五七七、人名・寺社名二九八五、役職名六二二)。同一頁に頻出する名称があることから、本文の各箇条に付与した通し番号(五一一九)をもって指示した。地名は、信濃国以外については国郡名を、人名については地名や役職名を補記した。また、人名では、受領名、官名、通称、院号については、できるだけ諱を補記したが、徹底することができなかった。さらに人名・寺社名の数は当初三四二五で、索引全体で約八〇頁となったため、同一箇条にのみ出現する家族や一族は一行に併記するなど、紙数を圧縮したため、不備な点も多いと思われるが、利用の便に寄与できれば幸いである。

名著出版 A5判

総頁四五〇頁(解題・本文三八三頁、地名、人名・寺社名、役職名索引 六七頁)

定価九五〇〇円(税別)

## 第二次世界大戦期アジアにおける「戦争とアーカイブズ」の問題 ——一九九七年度在外研究報告——

安藤 正人

一九九七年四月五日から同年十月五日までの六か月間、文部省在外研究員としてイギリスに滞在した。研究テーマは「第二次世界大戦時及び戦後の日本植民地及び占領地における記録史料の取り扱いについて」である。以下簡単にその報告をしたい。

第二次世界大戦前後の時期、世界各地の戦争地域あるいは占領地域で、公文書や古文書など重要な記録史料（アーカイブズ）が、軍事上・行政上・文化上の理由から盛んに押収、略奪、破壊された。こうした行為によって消滅したり国外に流出した記録史料は膨大な量にのぼり、歴史研究の障害になっているばかりか、時として外交上の問題をも生じさせている。しかし、その実態は必ずしも明らかになっていない。

現在、ユネスコによる「世界の記憶 Memory of the World」プロジェクトや国際文書館評議会 International Council on Archives, ICA の活動によって、国外流出史料の調査と原状回復への模索が進められているが、ヨーロッパに比べアジアでは

取り組みが遅れている。そこで本研究では、中国や東南アジアの旧日本植民地ならびに占領地を主たる対象とし、一九三〇年代から第二次世界大戦終結前後までの時期に、現地の歴史的文書やヨーロッパ植民地時代の文書、さらには日本統治時代の公文書や進出企業記録などが、どのような取り扱いを受け、どのような運命をたどったのかを歴史的に検証することを意図した。

私がこの研究テーマに着手したのは一九九六年。手始めにマレーシアで三週間の調査を実施した。それなりの成果があったが、この地域の史料を最も豊富に持っているのは何と

いっても旧宗主国イギリスである。イギリスには中国関係文書も多いらしい。というわけで、六か月のイギリス滞在となった。

外交文書や軍事文書を含む英国政府の公文書史料は、ほとんどすべてロンドン郊外のキューにある国立公文書館（パブリック・レコード・オフィス、略称 PRO）に収蔵されている。そこで、PRO の近くにフラ

ットを借り、半年間ほとんどの日を PRO 通いに費やした。幸いにも大量の関係史料を収集できたが、帰国後すでに十か月近くになるというのに、分析はほとんど進んでいない。よって以下では、とりあえず収集してきた史料の中からいくつかの話題を紹介して、報告の責を塞ぎたいと思う。なお、文中（ ）で記したのは PRO の文書群番号である。

\*

戦時期における在外公館文書の取扱い

戦時期における在外公館文書の取扱いは、国際法とも関わって極めて重要な問題と思われる。PRO 所蔵の外務省文書にも、大量の関係史料が見出される。イギリスは一九三七年頃から、開戦に備えて在外公館文書の疎開を開始し、一九四〇年には戦時特別規則を定めて、世界中の在外公館に対し文書の非常廃棄などについて指示している（FO371/2506 など）。しかし開戦後、北京、上海、広東、サイゴンなど多くの日本占領地域でイギリス大使館・領事館文書に対する日本軍の不法押収行為が発生した。この問題をめぐっては、中立国を介した日英両国政府の緊迫したやりとりが続いている（FO371/35964 など）。

ちなみに、在東京イギリス大使館は一九四〇年に重要文書をカナダに避難させているが、開戦直後、東京や横浜のイギリス大使館・領事館に日本の官憲が立ち入り、残された文書の搜索を強行する。これに対し、イギリス側はシンガポールの日本大使館を搜索するなどの対抗措置をとっている（FO370/595、FO371/28058 など）。

戦時における在外公館文書の取扱いをめぐる交戦国間の確執は、ヨーロッパでも頻繁に発生している。上海における土地関係記録の問題

一九三七年の第二次上海事変によって、日本軍は国際共同租界以外の上海全域を占領するにいたる。その際、国民党支配下にあった上海市政府は、土地管理局の重要記録などをイギリスが主導権を握る共同租界参事会に委託して上海から撤退する。この土地関係記録は、上海の行政権を掌握するために不可欠な記録であったらしく、日本側はその後「上海特別市政府」（日本軍が設置した傀儡政府）を前面にたてて、その引き渡しを参事会に要求している。結局イギリスが折れて、一九四〇年七月に文書引き渡しが行われるが、それに対して中国国民政府は強硬な抗議を行っている（FO371/24683 など）。



私の関心から見ると、この事件は、日本が中国や東南アジアの占領地行政を実施する上で、現地の旧政権文書をどのように利用したか、あるいは利用しようとしたかを具体的に知ることのできる数少ない事例である。上海共同租界というユニークな場を舞台にした、記録をめぐる外交紛争という点でも、興味深い素材である。開戦時における記録文書の疎開

一九四一年十二月八日のアジア太平洋戦争開戦直後、マレー半島のイギリス植民地政府ならびにイギリス軍は、日本軍の侵襲から記録文書を守るために、いくつかの疎開作戦を実行している。最も大規模だったのは、マレー土地調査局が保有していた軍事地図類ならびに関係記録の疎開で、陥落直前のシンガポールからオーストラリアに向けて運び出された。これに関する史料は、クアラルンプールのマレーシア国立文書館に保存されているイギリス軍政府記録(BMA Records)と、オックスフォード大学ローズハウス図書館のノーブル文書(C. Noble Paper)にたくさんあるが、なぜかPROでは断片的にしか見いだせなかった。

ほかに、開戦時における記録文書の疎開例としては、マレー連合州文

書とセラングール州庁文書のクアラルンプールからシンガポールへの避難がある。これについては、日本軍が、マレー占領後、昭南市と改名したシンガポールにおいて執拗な追跡調査を行っている。

日本軍による記録文書の略奪・押収は、先に述べたイギリスなど連合国側在外公館における不法な文書押収のほかに、さまざまな形で記録文書の略奪・押収が行われたようである。たとえば香港では、海上捕獲審判所の審判記録が日本軍によって持ち去られたとして、戦後日本政府に返還を要求しており(FO362/2048)、マレー半島でも地方行政の結婚・死亡登録書などの行政記録や、博物館・図書館が保存していた歴史文書が数多く失われたことが、イギリス軍政府による戦後の被害調査で明らかになっている(WO220/560など)。

イギリス軍政府によるこの調査は、「記念物・美術・記録史料課」(Monument, Fine Art and Archives Section)が担当している。その活動は、連合国がヨーロッパで大規模に展開した「文化財・記録史料救難作戦」(後述)のアジア版といえるもので、今後さらに詳しく研究する必

要がありそうだ。

敗戦時における日本の在外公館文書

戦争終結後、日本を占領した米軍が数多くの公文書や企業記録を押収し、そのかなりの部分をワシントン・ドキュメント・センターに送ったことはよく知られている。同じように、海外の日本大使館・領事館や日本企業でも、連合国側による文書の押収が行われた。それに関する史料は、イギリス外務省文書のうちFO371というクラスの一九四五年分だけ見ても、一〇〇ファイル以上あり、概況ながら世界各地での事情が判明する(FO371/46454, 46457など)。

これによると、日本の在外公館文書は、敗戦直後スイスやスウェーデンなど中立国の保護下に置かれていたが、一九四五年十月のマッカーサー指令により、米英中ソ四か国の管理下に移された。ただ、(アジアからは離れるが)バチカンの日本代表部文書のように、事前に大半廃棄された場合も多かったようだ(FO371/54117)。サンチアゴの日本大使館文書のように、ワシントンに送られたことが明白にわかる場合もある(同前)。これらの文書は今どうなっているのだろうか？興味深い問題である。

ヨーロッパにおける状況

ヨーロッパにおける状況は本研究の中心課題ではないが、関連して調べるべきことが多い。その内のひとつが、先に触れた「文化財・記録史料救難作戦」である。この作戦名は私の仮の命名だが、イタリアとドイツ、とくにドイツにおいて一九四四年から米英の主導のもとに展開された、大規模な史料調査・収集活動をさしている。

ドイツでの記録文書の調査や押収は、戦犯裁判ならびに占領行政目的と、文化遺産保護目的との二つの側面があり、実際にはこの両者が密接に絡まって展開した。その中心になったのが、連合国ドイツ管理委員会の「記念物・美術・記録史料部」(Monument, Fine Art and Archives Branch, 略称MFA&A)である。最初イギリスとアメリカが独自に活動を開始し、のち共同行動をとることになるのだが、この部隊は「戦争とアーカイブズ」の問題を考える上で有用な記録を多く残している(FO 1050, WO220, T209など)。なおイギリスの「文書館の父」として有名なヒラリー・ジェンキンソン卿も、このとき国立公文書館からMFA&A部隊に派遣されて活躍した一人である。

## 私の村落史研究

山崎 圭

私は本年四月一日付で史料館の助手に就任した。「新任の助手として何か文章を書け」とのことであるが、就任してまだ日が浅いため業務に関連して述べるような内容はまだ見出せない。ここでは業務とは少し離れるかもしれないが、また館報の記事にあさわしいかどうかという疑問も残るが、自分の研究のことなどについて少々触れることで責めを塞ぐことにしたい。

私はこれまで信州、特に佐久地方の史料を利用して村落史の研究を行ってきた。同地は信州でもとりわけ史料の豊富なことで知られ、数千点に及ぶ文書の所蔵者が多数存在している。現在までは主として、近世の村運営のあり方を考えるのに、それが村落構造によってどのように規定されていたのか、といった運営に対する構造の規定性を明らかにすることを課題にしてきた。具体的には、百姓が村内部で相互に取り結んでいたさまざまな関係（集団）を位置づけながら構造を論ずるために同族や組などの実態を分析したり、また、

そのような小百姓を包摂する組・同族といった結合が強い力をもっている村落構造をとる限り（近世前半）「小百姓層」のような横の結びつきは弱いので百姓代は小百姓の代表とはなりえず、その成立も領主的契機による部分が大きかったこと、などを論じてきた。近年では、村自治論や組合村論に対して、その研究史的意義を認めつつも、それが経済的側面を捨象していることの問題性を批判し、あらためて構造論的な分析が必要であることを主張する研究が出てきており重要だと考える。私自身は経済的な階層をこえた結合、およびそのような結合が経済的分解の前に変質していく過程に注目したが、事例とした本百姓・抱関係はこの地方に特徴的なものであるため一般化という点でいまだ不十分であり、今後当館が所蔵する全国各地の文書にあたりながらあらためてこの点を検討していきたいと考えている。

このようにこれまで村落の構造と運営について考えてきたのだが、地域のそれについても幅を広げて考え

ていく必要がある。この点にかかわる研究の一つに組合村論があるが、そこでは信州の幕領もその論理の中に位置づけられている。久留島浩氏は、惣代庄屋（組合村の惣代）がそのまま郡中惣代（郡中全体の惣代）となるⅠ型と、惣代庄屋とは別個に郡中惣代が存在するⅡ型、の二つに幕領を大別して論じ、備中・甲斐などがⅠ型、信濃・飛騨などがⅡ型だと説明している（『歴史学研究』一九八二年度大会特集号）。久留島氏自身はⅠ型の分析を行い、Ⅱ型については信州の場合鈴木寿氏や湯本豊佐太氏の研究に依拠して論じている。しかし、この信州幕領がⅡ型に属するという議論については、史料を詳細に検討すると「郡中代」のほか「郡中惣代」も同時に存在することが確認できるので（これまでは「郡中代」は「郡中惣代」にほぼ等しいものと考えられてきた）、この両者によってなされる地域支配・運営という形で再検討が必要である。郡中代は郷宿を兼ねる場合が多いようであり、郷宿と郡中惣代の関係ということであればⅠ型にも共通するはずである。これは信州に限定した事例にすぎないが、Ⅰ・Ⅱ型の類型については点検の余地があるのでは

ないかと考えている。また、信州幕領に関する湯本氏や鈴木氏の研究は、早い段階から幕領のいわゆる「中間支配機構」に注目したという点で研究史上大きな意義をもつと考えるが、残念ながら近世後期の問題しか扱っていないためそれ以前についてどう考えるかという点では現在もなお課題を残している。一方で同じ時期に古川貞雄氏が、寛永末年に武田氏以来の系譜を有する甲州系代官が交替すると、それにとりもなつて在地手代が排除されて代わりに代官家人で非在地の手代が送り込まれるというように地方支配機構が一変したことを明らかにしている（『信濃』二三巻七・九号）。古川氏と湯本氏・鈴木氏は同じく幕領（含甲府徳川領）における地方支配機構のあり方を問題にしているながら、近世初期における在地土豪制の終焉から近世後期における郡中代の成立までの間が空白となつてしまい、連続的に議論されていない。このことはこの地方の研究にとつて大きな問題であると感じているが、信州のみにとどまる問題でもないだろう。全国的に見ても、在地土豪制の後退過程と惣代庄屋制の成立過程は十分に関連づけて論じられてはいないのではないだろうか。

このような問題関心を私は現在もっているが、フィールドとしている信州では一九七〇年代前半に上記の諸研究が発表されて以来、この問題について十分な批判的検討があまりなされていないようなので、近年の成果をふまえつつ改めて取り組みたいと思っている。現在のところ、在地手代が排除された後の地域支配のあり方について、その後に派遣される非在地手代が拠点とする陣屋設置のあり方と、その土地のことを直接には知らない手代の支配を補完する陣屋元村名主の活動に注目して検討している。これらの点については別の機会に詳しく論じるつもりである。

中途半端な書き方ではあるが、最近考えていることの一端を述べてみた。このような研究に必要な史料の収集を行うために佐久など信州の各地を訪ねて感じることは、『長野県史』などの重厚な成果があるため、どのような史料がどの家にあるのかという所在状況については比較的よくつかめるといふことと、その一方で個別の家レヴェルでの整理・保存処置・目録作成などはあまり進んでいないように思われるということである。長野県は地域史研究の盛んなことで知られているが、この点につ

いては今後若干の課題を残しているように思う。もちろん自治体史編纂その他で悉皆調査などを地道に行っている所も少なからずあることは確かである。私自身はというと非力で何もせず、整理済史料に頼ってきたが、次第にそうもいかなくなり、主として利用する史料群だけでも整理しようと少々改心している。上記の研究と関わって、このところ中之条陣屋の立地した中之条村で名主や郡中代を勤めた中島家文書（中島源雄氏所蔵）の調査を仲間とともに行っている。その一部にはかつて鈴木寿氏らが調査した際のものと思われる荒仕訳が施されていたが、このような保管状況も記録しながら未整理分も含めて一点ずつ整理している。まだ調査途中だが、その課程で中之条村とは直接関係のない村々の相論訴状下書などが多数存在することなど史料の残り方から考えることもあった。信州の調査では、大都市部に比べて多人数が集まることが難しく、文書は多い、ということが悩みだが、今後も多くの人と協力しながらこのような調査を進めたい。

## 平成九年度 新収史料紹介

### 伊豆国田方郡葦山江川家文書

葦山江川家には、近世中期から幕末・維新期にかけての代官文書が大量に伝来しており、幕府代官文書としては屈指のものである。

当館では、昭和四二年度に五四リールの文書を撮影し、さらに昭和六三年度に七リール、平成元年度に六リール、同二年度に三リールを撮影してきたが、いまだ重要と見られるものが少なくないため平成九年度に再度収集を実施した。収集史料は、「公事方銘書」（寛政十一年）慶応四年）一冊、「公事方御用留」（寛政十一年、文政二・五・九年、天保二・四・五・八・十・十四年、弘化三年、嘉永二・七年、安政二・三・四・五・六・七年など）二三冊である。これらは過去に収集したものと同様に紙焼のうえ公開される。なお、閲覧には江川文庫の許可を必要とするので、事前にご連絡いただきたい。（現蔵者＝江川文庫、静岡県田方郡葦山町葦山、電話〇五五九四一九一―〇〇二、収録点数六リール、三三二（コマ）

## 受贈図書

### 平成九年度 (一)

〔一〕内は寄贈者名（敬称略）ただし、省略されている場合があります。

北海道開拓記念館一括資料目録 第29―31集（北海道開拓記念館）

市立函館図書館蔵郷土資料分類目録 第13・14分冊（函館市立函館図書館）

釧路市立博物館収蔵資料目録（ⅩⅦ）（釧路市立博物館）

北海道立文書館所蔵資料目録 12（北海道立文書館）

北海道立文書館所蔵公文書件名目録 12（北海道立文書館）

苦小牧市博物館所蔵資料目録 11（苦小牧市博物館）

北海道立アイヌ民族文化研究センター資料目録 2（北海道立アイヌ民族文化研究センター）

端野町立歴史民俗資料館収蔵資料分類目録（端野町立歴史民俗資料館）

市町村別収集資料目録（北海道教育大学附属図書館）

青森県立郷土館収蔵資料目録 第7集（青森県立郷土館）

青森県立郷土館収蔵資料目録 第1集（青森県立郷土館）

岩手県立博物館収蔵資料目録 第13集（岩手県立博物館）

（財）岩手県文化振興事業団

仙台市博物館収蔵資料目録 VII・VIII (仙台市博物館)

宮城県高等学校和漢古書総合目録 (宮城県高等学校教育研究会図書館研究部会)

秋田県立博物館収蔵資料目録 自然 I・II、民族 I・II、考古 (秋田県立博物館)

秋田県公文書館所蔵古文書目録 第2集

〔秋田県公文書館〕

能代市史料目録 第1～6集 (能代市史編さん室)

〔秋田市立土崎図書館所蔵〕 間杉家文書目録・中村家文書目録・土崎御役屋文書目録・麻木家文書目録 (秋田市立土崎図書館)

古文書史料目録 第19号 (山形大学附属博物館)

山形県関係新聞記事索引 平成4・5年版 (山形県立図書館)

諸家文書目録 II (酒田市)

寒河江市史料所在目録 第7・9集

〔寒河江市教育委員会社会教育課〕

鶴岡市上郷地区文書目録 (鶴岡市上郷地区自治振興会)

歴史資料館収蔵資料目録 第28集 (財福島県文化センター)

郡山市歴史資料館収蔵資料目録 第11集

〔郡山市教育委員会〕

重要文化財指定記念中世結城家文書 (白

河市歴史民俗資料館)

白河市歴史民俗資料館資料目録 第一・二集 (白河市歴史民俗資料館)

岩瀬村史料所在目録 第一～四集 (岩瀬村)

下郷町史料目録 第1・2集 (下郷町史編さん委員会)

土浦市史料目録 第三～九集 (土浦市教育委員会)

史料目録 40・41 (茨城県立歴史館)

潮来町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録 (一)・(二) (潮来町教育委員会)

伊奈町史文書目録 第4集 (伊奈町教育委員会)

茨城県庁行政文書目録 (一) (茨城県立歴史館)

栃木県史料所在目録 第26集 (栃木県立文書館)

市貝町史料所在目録 (市貝町)

群馬県立文書館収蔵文書目録 15 (群馬県立文書館)

群馬県立歴史博物館所蔵資料目録 美術工芸 (群馬県立歴史博物館)

群馬県庁行政文書件名目録 第6・9集

〔群馬県立文書館〕

群馬県公共図書館雑誌・新聞総合目録 平成8年6月末現在 (群馬県立図書館)

埼玉県立文書館収蔵文書目録 第35・36集 (埼玉県立文書館)

諸家文書目録 第3集 (志木市)

埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期 III (埼玉県立文書館)

収蔵地図目録 第2集 (埼玉県立文書館)

行田市郷土博物館収蔵資料目録 考古 I、諸家文書目録 I・II (行田市郷土博物館)

坂戸市関係新聞記事資料目録 (一)・(二) (坂戸市教育委員会)

福岡河岸町家収蔵資料目録 (上福岡市立歴史民俗資料館)

入間市博物館文書目録 第1集 (入間市博物館)

春日部市郷土資料館資料目録 第1・2集 (春日部市郷土資料館)

松戸市古文書目録 (一)・(二) (松戸市収蔵文書目録 第8～10集 (千葉県文書館))

成田山仏教図書館新着図書目録 第81・82号 (成田山仏教図書館)

千葉県立大根根博物館収蔵資料目録 3

15 (千葉県立大根根博物館)

袖ヶ浦市史料目録 [3]・[4] (袖ヶ浦市教育委員会)

千葉県史編さん資料千葉県地域史料現況記録調査報告書 第2・3集 (財千葉県史料研究財団)

東金市に関する新聞記事索引 1978

1984年、1985～1995年

〔東金市立東金図書館〕

佐原市文化財目録 (佐原市教育委員会)

大原幽学関係歴史資料調査報告書 (干潟町教育委員会)

干潟町所蔵資料目録 (干潟町教育委員会)

関宿城歴史資料調査報告書 [I]・[II] (千葉県教育委員会)

千葉県立中央図書館雑誌目録 (千葉県立中央図書館)

千葉県山武郡芝山町史料目録 第一～三集 (芝山町教育委員会)

聖徳大学川並記念図書館所蔵視聴覚資料目録 (ビデオソフト) (学校法人東京聖徳学院)

聖徳大学言語・文学部図書目録 (学校法人東京聖徳学院)

日本寺壇林関係資料目録 (多古町教育委員会)

明治大学刑事博物館目録 第58号 (明治大学刑事博物館)

東京都文化財総合目録 平成七年度版 (東京都教育庁生涯学習部文化課)

学習院大学史料館所蔵史料目録 第12・13号 (学習院大学史料館)

公文類聚目録 第一二 (国立公文書館)

五日市町史料 第四一八号 (五日市町郷土館)

品川歴史館資料目録 地図編 (2) (品川区立品川歴史館)

東京大学史料編纂所蔵宗家史料目録

〔東京大学史料編纂所〕

東京都立中央図書館蔵木子文庫目録 第

3巻〔東京都立中央図書館〕

三井文庫所蔵史料主要帳簿目録〔京西替

店等作成分〕〔財団法人三井文庫〕

和装本目録 第一〔共立女子大学図書館〕

東京都立中央図書館東京資料目録―和図

書1996年9月末現在 上・下巻、

書名・著者名索引〔東京都立中央圖書

館〕

東京都立中央図書館逐次刊行物目録〔新

聞・雑誌 1996年11月末現在〕〔正

編〕・索引編〔東京都立中央図書館〕

東京都立中央図書館朝鮮語圖書目録〔東

京都立中央図書館〕

東京大学史料編纂所写真帳目録〔1〕

〔3〕〔東京大学史料編纂所〕

河野省三記念文庫目録〔國學院大學日本

文化研究所〕

近世・多摩地域の文庫目録〔法政大学大

学院日本史学専攻室〕

第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係

文庫目録〔日本語教育史研究会〕

東京に関する文庫目録 雑誌文庫編〔財

東京市政調査会〕

関東大震災に関する文庫目録〔財東京市

政調査会市政専門図書館〕

東京都公文書館所蔵関東大震災関係資料

目録〔東京都公文書館〕

足利文庫解題圖書目録〔大田区立大田図  
書館〕

新宿歴史博物館所蔵資料目録 1〔新宿

区教育委員会〕

飯久保貞次旧蔵安藤太郎関係文書目録

〔青山学院資料センター〕

井上匡四郎文庫目録〔1〕〔2〕〔國學院大

學図書館〕

重要文化財日本学士院所蔵藤田貞次関係

資料目録〔日本学士院〕

貨幣博物館展示品目録〔日本銀行金融研

究所〕

板橋古文書調査目録〔板橋区教育委員会〕

島津家文書目録〔黒漆塗箱分〕〔東京大

学史料編纂所〕

信州更科郡南牧村文書〔立正大学〕

神奈川県関係新聞記事索引 第34集〔神

奈川県立図書館〕

山北町所在史料目録 第四集〔山北町教

育委員会〕

平塚市資料所在目録 第7集〔平塚市博

物館市史編さん係〕

寒川町史料所在目録 第12集〔寒川町

企画部町史編さん課〕

寒川町史新聞記事目録 第9集〔寒川町

企画部町史編さん課〕

神奈川県立図書館・神奈川県立川崎圖書

館増加図書・書名索引 1995〔神

奈川県立図書館〕

開成町資料所在目録 第3集第1・2分

冊〔開成町庶務課町史編さん室〕

綾瀬市史資料所在目録稿 第1集〔綾瀬

市〕

綾瀬市史新聞記事目録 第1集〔綾瀬市〕

箱根町郷土資料館所蔵資料目録 第1集

〔箱根町立郷土資料館〕

藤沢市教育史資料目録〔稿〕第1―四集、

耕餘塾関係資料〔藤沢市教育文化セン

ター〕

藤沢市史新聞記事目録〔藤沢市文書館〕

神奈川県刊行物目録 平成4―7年度

〔神奈川県民部県政情報室情報班〕

旧制高等学校文庫目録〔財団法人大倉精

神文化研究所〕

新潟県公文書簿冊目録 第3集〔新潟県

立文書館〕

資料目録 第1―百四集〔十日町市史編

さん委員会〕

新潟県関係新聞記事索引 昭和47―平成

元年〔新潟県立新潟図書館〕

亀田町史料目録〔亀田町教育委員会〕

糸魚川市歴史民俗資料館所蔵相馬御風宛

書簡目録〔糸魚川市教育委員会〕

環日本海経済交流に関する文庫目録〔第

3・4・6輯〕〔富山大学日本海経済

研究所〕

富山県公文書館資料目録 現代資料〔富

山県公文書館〕

南家七村入合山文書目録〔福野町図書館〕

富山藩西猪合関所番人橋本家文書目録

〔猪合関所館〕

瑞願寺文書目録〔瑞願寺〕

富山県関係新聞記事索引 平成7年度版

〔富山県立図書館〕

逸見文庫蔵書目録〔小矢部市立石動圖書

館〕

高参寺和漢書分類目録〔高参寺〕

十村役真館家文書目録・加賀藩士小幡家

文書目録〔石川県立図書館〕

加賀藩十村役石黒家文書目録〔小松市教

育委員会〕

能登羽咋十村加藤日記目録〔第一―四輯〕

〔羽咋市歴史民俗資料館〕

七尾市立図書館古文書目録〔七尾市立図

書館〕

十村岡野家文書目録〔押水町教育委員会〕

古書目録〔正編〕・補遺版〔金沢大学医

学図書館〕

大月市史資料分類目録〔大月短期大学〕

長野県行政文書目録 行政簿冊3〔長野

県立歴史館〕

長野県絵図・地図目録〔長野県立歴史館〕

御馬寄村古文書目録〔浅科村教育委員会〕

大垣市立図書館郷土資料目録 第1―16

集〔大垣市役所〕

岐阜県所在史料目録 第38―40集〔岐阜

県歴史資料館〕

岐阜県行政文書目録 昭和49年度編〔2〕

〔岐阜県歴史資料館〕

岐阜県史料調査報告書 第17号〔岐阜県

歴史資料館

切通村文書目録〔岐阜市歴史博物館〕

高林家文庫目録〔浜松市立図書館〕

老松園文庫目録〔浜松市立図書館〕

静岡県行政資料目録〔昭和60年1月～平成2年12月〕、〔昭和60年1月～平成3年12月〕、〔昭和60年1月～平成5年6月〕〔静岡県立中央図書館〕

静岡県立中央図書館蔵書目録 第10巻

索引編、分類編〔静岡県立中央図書館〕

沼津市明治史料館史料目録 19・20〔沼津市明治史料館〕

小山町史資料所在目録 第22集〔小山町町史編さん室〕

静岡県周智郡森町所在古文書文書目録 第11・12集〔森町史編さん委員会〕

静岡県永年保存文書総目録〔昭和20～60年代編、明治・大正・昭和戦前編、追録〕〔静岡県総務部文書課〕

伊東市立伊東図書館・郷土資料目録〔伊東市立伊東図書館〕

資料目録 徳川・松平家ゆかりの女性

相良町資料目録〔第2～4集〕〔相良町教育委員会〕

静岡市追手町図書館所蔵静岡市関係地方行政資料目録 1993年12月現在

〔静岡県追手町図書館〕

清水市所蔵古文書目録 第〔1〕～5集

〔清水市役所〕

清水市立中央図書館徳川文庫目録〔清水市立中央図書館〕

天竜市近代文書目録 1・2〔行政〕

〔天竜市史編さん室〕

静岡県磐田郡豊岡村所在文書目録 第1～5集〔豊岡村役場〕

袋井市郷土史料目録 第1～7集〔袋井市教育委員会〕

富士市立博物館所蔵旧中里村大坪関家文書目録〔富士市立博物館〕

紅日書楼文庫目録〔浜松市立中央図書館〕

松島家資料目録〔浜松市立中央図書館〕

遠州報国隊関係資料目録〔浜松市立中央図書館〕

竹山家文書目録〔正編〕・続編〔浜松市立中央図書館〕

愛知県郷土資料総合目録 4〔愛知県図書館協会〕

刈谷市史文書目録 2〔刈谷市教育委員会〕

名古屋市博物館蔵品目録 第2分冊美術・彫刻・工芸編〔名古屋博物館〕

三重県史資料調査報告書 XI〔三重県生活文化部学事課〕

愛知大学中部地方産業研究所 産業館収蔵資料目録 1〔愛知大学中部地方産業研究所〕

愛知県西加茂郡三好町福田酒井家文書目録〔三好町酒井家調査団〕

皇學館大學史料編纂所蔵鈴木敏雄氏遺稿

・旧蔵資料目録〔正編〕・続編〔皇學館大學史料編纂所〕

上野市安場区・区有文書目録〔上野市役所総務部庶務課市史編さん室〕

上野市東谷区・区有文書目録〔上野市役所総務部庶務課市史編さん室〕

旧上野市史資料の引継ぎ目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

新居事務連絡所所蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市三田事務連絡所所蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市友生事務連絡所所蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市依那古事務連絡所所蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市花之木事務連絡所所蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市印代区・区有文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市羽根中村明彦氏所蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

上野市恵美須町宮城家旧蔵文書目録〔上野市役所総務部市史編さん室〕

滋賀大学経済学部附属史料館所蔵史料目録 第四十六集〔滋賀大学経済学部附属史料館〕

安土城・織田信長関連文書調査報告2・4・5〔滋賀県安土城郭調査研究所〕

滋賀県教育史資料目録〔1〕～〔6〕〔木全清博室〕

・滋賀大学教育学部社会科教育研究室

中主町文化財調査報告書：第八・二二・二三・四六集〔中主町教育委員会〕

京都府資料目録追録 No.12・13〔京都府立総合資料館〕

土佐派絵画資料目録〔六〕〔京都市立芸術大学芸術教育振興協会〕

学校歴史資料実態調査〔京都市教育委員会事務局総務部調査課〕

細見小学校収蔵生活文化財目録〔三和町立細見小学校〕

高槻市史史料目録 第十九号〔高槻市役所〕

川中家文書目録 近世の部、近代の部〔大阪府公文書館〕

大阪府行政刊行物目録 平成7・8年度版〔大阪府公文書館〕

箕面市地域史料目録集 二四〔箕面市役所総務部行政管理課市史編さん所〕

大阪商業大学商業史研究所史料目録 第三集〔後編〕・第五集〔大阪商業大学商業史研究所〕

道修町文書目録・近代編〔補遺〕Ⅰ〔道修町文書保存会〕

大阪府公文書館所蔵公文書・刊行物目録、大阪府行政資料・刊行物収集目録〔大阪府公文書館〕

和泉国泉郡三林村文書目録〔大阪府立大學〕

〔以下次号〕

# 平成10度 史料管理学研修会 カリキュラム構成

## A. 長期研修課程（東京会場）

### 一 [文書館総論]

1. 史料管理学とは何か 史料館長 高木 俊輔
2. 文書館の歴史と現在 史料館助教授 大友 一雄
3. 現代アーキビスト論 史料館教授 安藤 正人
4. 地域社会と文書館 八潮市立資料館長 遠藤 忠
5. 文書館の法律問題 東京大学名誉教授 井出 嘉憲
6. 史料の公開と利用 史料館教授 鈴江 英一
7. 史料の普及活動 史料館助教授 山田 哲好

### 一 [記録史料論]

1. 記録史料総論 史料館助教授 渡辺 浩一
2. 情報とコミュニケーション IRIS情報学研究所長 仲本秀四郎
3. 組織体と記録 駿河台大学専任講師 村越 一哲
4. 古代中世史料論 東京大学史料編さん所助教授 林 譲
5. 近世史料論Ⅰ（総論・幕藩寺社の史料） 史料館助教授 大友 一雄
6. 近世史料論Ⅱ（村の史料） 史料館長 高木 俊輔
7. 近世史料論Ⅲ（町の史料） 史料館助教授 渡辺 浩一
8. 近現代史料論Ⅰ（行政の史料） 史料館教授 鈴江 英一
9. 近現代史料論Ⅱ（個人の史料） 駿河台大学教授 広瀬 順皓
10. 近現代史料論Ⅲ（民間の史料） 史料館教授 丑木 幸男
11. 近現代史料論Ⅳ（企業の史料） お茶の水女子大学教授 小風 秀雅
12. 史料論特論（中世村落の史料） 史料館客員助教授 蔵持 重裕

### 一 [記録史料管理論(1)一総論及び調査収集論一]

1. 記録史料管理論総論 史料館教授 丑木 幸男
2. 記録管理論 あふれんつ研究所代表 作山 宗久
3. 史料調査論 史料館教授 安藤 正人
4. 官公庁文書の評価と移管 北海道立文書館首席文書専門員 佐藤 京子
5. 地域史料の収集と受入 神奈川県立公文書館郷土資料課副主幹 小松 郁夫  
同 副主幹 田島 光男
6. 史料管理学特別講義 史料館客員教授 永村 眞

### 一 [記録史料館理論(2)一整理記述論一]

1. 史料整理と目録編成の理論 史料館助手 福田 千鶴
2. 近世史料の整理と目録編成Ⅰ 史料館助手 福田 千鶴
3. 近世史料の整理と目録編成Ⅱ 史料館助手 福田 千鶴  
同 助手 青木 睦
4. 近現代史料の整理と目録編成 史料館教授 鈴江 英一  
同 助教授 山田 哲好
5. 文書館とコンピュータ 国文学研究資料館研究情報部助教授 原 正一郎  
史料館助教授 山田 哲好

## 一 [記録史料管理論(3)一保存館理論一]

1. 文書館における史料保存活動 史料館助手 青木 睦
2. 史料の保存環境と劣化損傷要因 東京国立文化財研究所修復技術部長 増田 勝彦  
東京芸術大学美術学部助教授 稲葉 政満
3. 史料の劣化損傷の予防 史料館助手 青木 睦
4. 劣化損傷史料の保存修復Ⅰ 東京国立文化財研究所修復技術部長 増田 勝彦  
東京芸術大学美術学部助教授 稲葉 政満
5. 劣化損傷史料の保存修復Ⅱ (株)宇佐美松鶴堂取締役 宇佐美直治  
同 取締役 宇佐美直秀  
同 取締役 田中 保
6. 史料複製論 日本写真映像専門学校名誉校長 後藤 公明
7. 文書館の災害対策 国際連合地域開発センター防災計画主幹 小川雄二郎

## 一 [史料管理の実際一施設訪問一]

1. 八潮市立資料館における史料管理 八潮市立資料館長 遠藤 忠
2. 東京大学史料編さん所における史料管理 東京大学史料編さん所助手 箱石 大
3. 国立公文書館における史料管理 国立公文書館企画担当課長補佐 西山 春夫
4. 国立国会図書館における史料管理 国立国会図書館政治史料課長補佐 井坂 清信
5. 神奈川県立公文書館における史料管理 神奈川県立公文書館郷土資料課長 樋口 雄一  
同 行政資料課長 平岡 孝弥

## B. 短期研修課程（東京会場）

### 一 [文書館総論]

1. 現代の文書館とアーキビストの役割 史料館長 高木 俊輔

### 一 [記録史料論]

1. 記録史料総論及び近世史料論 史料館助教授 渡辺 浩一
2. 近現代史料論 史料館教授 丑木 幸男

### 一 [記録史料館理論]

1. 官公庁文書の評価と移管 史料館教授 安藤 正人
2. 地域史料の調査と収集 史料館教授 安藤 正人
3. 近世史料の整理と目録編成 史料館助手 福田 千鶴
4. 近現代史料の整理と目録編成 史料館教授 鈴江 英一
5. 文書館とコンピュータ 史料館助教授 山田 哲好
6. 史料の保存環境と劣化損傷の予防 史料館助手 青木 睦
7. 劣化損傷史料の保存修復 宮内庁書陵部修補師長 横山 謙次  
同 総理府技官 細井歌寿男
8. 史料の利用と普及活動 史料館助教授 大友 一雄

## 一史料管理の実際一

1. 外務省外交史料館における史料管理 外務事務官 柳下 宙子

# 彙報

○平成一〇年度史料管理学研修会（第四回）の開催

本年度の長期研修課程は、前期が平成一〇年六月二九日～七月二四日、後期が平成一〇年八月三十一日～九月二五日の日程で東京会場（国文学研究資料館）で開催された。短期研修課程は、平成一〇年十一月九日～二〇日の日程で、東京会場（同前）で開催される（受講者は決定済）。カリキュラムは別掲（前頁）の通り。

○運営協議会と評議員会の開催

本年六月三〇日に運営協議会が、七月二三日に評議員会がそれぞれ開催され、管理運営について評議ないし協議された。

○大学院原典講読セミナー

本年八月二四日～二八日の日程で開催され、当館教授安藤正人が「松江藩郡奉行所文書―「近世の裁判記録」を読む」のテーマで三コマを担当した。

○文部省科学研究費補助金の交付

・基盤研究A試験「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」（代表 丑木幸男）に三年計画の三年目として二七〇万円が交付された。

・基盤研究C「史料に用いられた紙資料群の科学的類別に関する研究」（代表 青木睦）に三年計画の三年目として二

〇万円が交付された。

・基盤研究C「近世の国家的祭祀儀礼に関する基礎的研究」（代表大友一雄）に三年計画の二年目として五〇万円が交付された。

・研究成果公開促進費「史料所在データベース」（代表高木俊輔）に一〇四六万円が交付された。

・国際学術研究「在欧日本史料の所在と現状に関する調査」（代表高木俊輔）に三年計画の二年目として六六〇万円が交付された。

○館内研究会

「二八二回」五月二日

史料管理学研修会講義準備報告Ⅰ

「二八三回」五月二八日

史料管理学研修会講義準備報告Ⅱ

「二八四回」六月四日

史料管理学研修会講義準備報告Ⅲ

「二八五回」六月九日

「史料学論集」研究会

「二八六回」六月二五日

史料叢書3「町村制の発足」の編成について

鈴木英一

○人事異動

・定年退職（本年三月三十一日付）

教授（史料館長） 森 安彦

・任期満了（本年三月三十一日付）

COE非常勤研究員 講師 森本様子

・退職

（平成一〇年三月三十一日付）

研究支援推進員

（平成一〇年六月三〇日付）

事務補佐員

採用

（本年四月一日付）

助手

史料管理研究室

客員教授（日本女子大学）

併任助教授（滋賀大学）

COE非常勤研究員

講師

リサーチ・アシスタント（再任）

（平成一〇年七月一日付）

事務補佐員

（平成一〇年九月一日付）

研究支援推進員

・外来研究員（平成一〇年九月一日～

二月三十一日）

韓国国史編纂委員会編史研究士

田 美姫

・昇任（本年四月一日付）

教授

助教授

併任

史料館長

第一史料室長

第二史料室長

第三史料室長

史料管理研究室長

高木俊輔

平成一〇年度史料管理学研修会（通算四五回）の開催予定

〈長期研修課程〉

国文学研究資料館 東京会場

前期 六月二八日～七月三日

後期 八月三〇日～九月二四日

〈短期研修課程〉

秋田市（会場未定）

二月八日～二月一九日

（前・後期、短期とも最後の二週間はレポートの作成にあてる）

史料館報 第六九号

平成一〇年（一九九八）九月三〇日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒二四一・八五八五

東京都品川区豊町一ノ六ノ二

電話〇三（三七八五）七二二（代）

FAX〇三（三七八五）四四五六

印刷所 東京都台東区寿三ノ一四ノ五

有限会社 スミダ

電話〇三（三八四二）七三三三